

保育内容「環境」におけるプロジェクト活動

大宮 摂子

The Project Activities

On 「Environment」 in Early Childhood

Setsuko Omiya

昨今、子どもの主体的な活動を促す協同的な学びの経験が求められ、乳幼児期の保育の質の重要性が問われている。就学前において、興味・関心を子ども自身が主体的に探究し、協同して問題解決する活動をプロジェクト活動と捉えた。

その活動は何か、保育者の役割とは何か、活動の可視化の重要性、学生が学ぶべき事柄などを明かにし、保育内容「環境」における現状での課題を提起している。

さらに、学生が参加するプロジェクト活動の体験学習を実施し、プロジェクト活動の有効性と問題点を確認したので報告した。

キーワード：プロジェクト活動、探究心、環境

Keywords : the Project Activities, The Spirit of Inquiry, Environment

I はじめに

子どもは、遊びや生活を通して「これなんだろう?」、「ふしぎだな」、「やってみよう」という好奇心や探求心が生まれる。そして、その疑問の解決のため、主体的な活動、対話的・協同的活動をすることが、学びに向かう力となる。乳幼児の保育においても、この点を重視されなければならない。

『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』は、(2017)に改訂(定)されたが、ここでは『保育所保育指針』(以後、『指針』とする)を取り上げた。その指針では、3つの段階に分けられ、0歳から1歳未満の乳児の段階、1歳から3歳未満児の遊びが充実して自己発揮する段階、3歳以上就学前の協同的な活動ができていく段階がある。環境の目的である「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」(厚労省 2017)をそれぞれの段階で達成していくことが求められている。

筆者は、主題(テーマ)があり、協同で取り組む、一日で終わらない主体的な探究活動をプロジェクト活動と定義づけし、その指導計画と実際の方法、保育内容「環境」でのあり方、保育者としての役割などはどのようなべきかを、3歳児以上の子どもに限定して研究することにした。

倉橋の「誘導保育」理論と久保田の「中心になる活動」理論が、画一的な保育でなく、子どもの主体性を重んじる保育であることに着目し、文献研究した。

さらに、学生が参加してのプロジェクト活動の体験学習を実施し、プロジェクト活動の有効性と問題点を検証した。

1 論文中の用語の定義

1) プロジェクト活動；

領域「環境」における、主題（テーマ）があり、協同で取り組む、一日で終わらない主体的な探究活動をプロジェクト活動とする。

2) 保育者；

幼稚園では「教諭」、保育園では、「保育士」、幼保連携型認定こども園「保育教諭」などがあるが、そのすべてを含む名称とする。

3) 子ども；

年齢を限定して記述している。ただし、すべての子どもを対象にしている場合は除く。また、指針、文献などから引用したものは、引用文のまま表記した。（例示）3歳以上の子ども、5歳以上の子どもなど。

II 研究目的

学生が「子どもの主体的な活動」をどのように捉えて、援助していくのかという、保育者の視点を養うために以下の3点の理由から教育実践を通して体験学習の有効性を明らかにすることが目的である。

- 1 学生自らが観察し体験することで、活動のプロセスを理解する。
- 2 子どもの興味・関心から発生したテーマ（主題）の援助方法を把握する。
- 3 学生が協同的に体験することで学生自身の学びの場になる。

III 研究方法

倉橋惣三と久保田浩の文献研究し、子どもの主体的な活動を育てる保育内容の領域「環境」におけるプロジェクト活動のあり方を研究した。プロジェクト活動についての筆者の考え方が、具体的な実践の場で当てはまるかを検証して、その成果と問題点を明らかにした。

学生による自然の体験学習を行い、課題を協力して取り組む体験を試み検証した。

研究にあたって、プロジェクト活動の基礎は0歳児からの信頼感による応答的関わりである。

「子どもの主体的な活動を促すためには、保育士等が多様な関わりを持つこと」が重要であり、乳児期からの保育者の温かく受容的、応答的な関わりの中で、大人との信頼関係を築き、子どもの情緒の安定や発達に必要な豊かな体験が得られるように援助することが土台となっている。3歳未満の子どもも好奇心を持って「これなあに？」と言葉や仕草で語りかけて大人と子ども、物との三項関係がつけられてくるのである。子どもが、見る、触れる、探索する等、自発的に関われる環境を整え、愛情豊かに応答的に行われることが特に必要である。この時期には、3歳未満児のみたて・つもりあそび、ふり遊びを十分に行う事が重要であり、3歳以上の好奇心・探究心につながっていくが、本論文では研究項目からはずした。

IV 研究報告

プロジェクト活動といえば、イタリアの小都市レッジョ・エミリア市の就学前教育「レッジョ・エミリア・アプローチ」により子どもたちの実践『子どもの100の言葉』が1987年にアメリカで展示され、急速に世界に広まっていったものをはじめ諸外国のものが先行例としてあげられる。しかし、そのまま日本の現在の保育にあてはめられるわけではないため、現代の保育にあった内容を模索した。

筆者は、「子どもの主体的な活動」を日本で初めて取り入れた倉橋惣三の「系統的保育案」の「誘導保育」を取り上げ、大正期当時の保育構造から保育者のあり方を学び、また、歴史から紐解き、昭和の久保田浩の「中心になる保育」を取り入れた保育構造が、子どもの主体的な活動であり探究する過程のなかで、話し合いによる問題解決への活動がされておりプロジェクト活動と捉えた。また、集団づくり、仲間づくりの保育は、現代に活かされるべきものであると考える

1 保育内容「環境」において『指針』が示すもの

新しい『指針』（厚労省 2017）の中で、「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」として「(1)「育みたい資質・能力」と「(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。

(1) では、「知識及び技能の基礎」, 「思考力、判断力、表現力等の基礎」, 「学びに向かう力, 人間性等」が挙げられている。さらに, (2) では, 就学前までに育ってほしい姿として, 下記の 10 項目が示された。

ア 健康な心と体, イ 自立心, ウ 協同性, エ 道徳性・規範意識の芽生え, オ 社会生活との関わり, カ 思考力の芽生え, キ 自然との関わり・生命尊重, ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚, ケ 言葉による伝え合い, コ 豊かな感性と表現

保育内容の 5 領域は, 相互に関係していくが, 項目の中で特に, 保育内容「環境」の観点からすると, 前述 (1) の 3 つの項目と (2) の「思考力の芽生え」, 「自然との関わり・生命の尊重」, 「数量や図、標識や文字などへの関心・感覚」が重視すべき点である。

1) 環境教育について

自然を敬愛する感性は自然体験から身につくため, この体験による気づきは, 大きな地球のあるいは宇宙の大気汚染や森林破壊等へと関心が広がっていくこともある。環境問題は, 一人の問題ではなく社会に共に生きている人みんなが関わることであるが, 科学的認識や判断力は, 学童期に身につけていくため, 乳幼児期には, 自然にふれ感動する心を大切にしたい。自然や科学についての幼児期の経験が将来に繋がっていくのである。

2) 思考の芽生えについて

(1) 子どもの探究活動の過程は好奇心・探究心から問題解決までの道筋をたどる。

① ア「おもしろそう！」という子どもたちの好奇心を, イ「これなんだろう？」という探求心, ウ「これってこうかな？」と関心をもち, エ「これでいいのかな？」と調べ, オ「そういうことか！」「わかった！」と課題解決を自らしていくのである。

この道筋は, 指針でいわれている「学びに向かう力」であり, 保育内容環境のねらいに関係する子どもが興味・関心をもちやすい自然, 身近な社会・生活等に関する主題(テーマ)を設定し, プロジェクト活動を取り組む事が望ましい。

② その土台となる自然との関わりで, 観て, 聞いて, 感じる感性を「環境」から形成し, 好奇心・探究心を育む非認知能力を高めていく事が重視する事項であるといえる。

③ 「数量や図, 標識や文字などへの関心・感覚」は, 日常の生活の中で, 無理なく身に付けていく環境を整えていく事が必要である。

2 プロジェクト活動の計画, 実施, 評価・反省の方法

プロジェクト活動の初回は, 子どもの自由な発想を基にして, 主題(テーマ)や計画もない, 子どもの自由な発想で「発生的」な活動である。2 回目以降の活動につなげるためにドキュメンテーションを作成しておくことが重要である。

2 回目以降のプロジェクト活動の計画は, 初回のドキュメンテーションを基に子どもの行動を意図的

に「予測」して、活動の計画を立て実施する。なお実施時には、新たなドキュメンテーションを作成しなければならない。そして、そのドキュメンテーションを基に活動の評価・反省をすることが重要である。以下は、プロジェクト活動の2回目以降について述べる。

1) 計画時の重要な点

(1) ドキュメンテーション

ドキュメンテーションは、活動中の子どもの様子、感動する、驚く、発見するなど個々の子どもの様子を写真や記録したもので保育者が作成したものである。

活動の1回目は、自由な発想による遊びから始まる。一人ひとりの子どもの様子をよく観察して「これって何かな」等つぶやきや行動を大切に、記録紙に残すこと、合わせて写真やビデオに残すことは、ドキュメンテーションを補完することになり効果的である。写真やビデオだけではドキュメンテーションに成りえないことに留意すべきである。

なぜならば、2回目以降のドキュメンテーションは、1回目と違いプロジェクト活動の主題(テーマ)に沿ったもので活動の様子を克明に記録し「予測」した点に関する子どもの様子・反応が様々な観点の記録になる必要がある。

従って 活動の計画に応じて主題(テーマ)、活動の内容が変われば、それに応じたドキュメンテーションの工夫がされなければならない。

(2) 主題(テーマ)の設定

- ① 子どもが興味・関心を持っていることで、子ども自身の知的な好奇心を揺さぶるような出来事等を保育者がとらえたドキュメンテーションとしての記録から職員間で共有する主題(テーマ)を設定する。
- ② 主題(テーマ)は、子どもの探究心を深めることができるように事前に検討する。
- ③ 保育者は、設定した主題(テーマ)による活動がどのような意義と効果になるかを考慮し問題解決にたどり着くことができるような設定をする。

(3) 実施計画を策定する

計画にあたっては、次の点に留意する。

- ① 主題(テーマ)をクラスあるいは職員間で決める。
- ② 主題(テーマ)に沿った活動計画を立てる。
- ③ 探究心を持たせるための動機づけを必要に応じて事前に行う。
- ④ 活動する際に他のクラスのプロジェクト活動についても情報を共有し配慮すること。

(4) 実施当日への準備のポイント

- ① 子どもの興味・関心を高めるための事前の動機づけをする。

主題(テーマ)に関する題材の絵本や図鑑等を活用して、子どもが気付くように保育者が言葉がけをする。

- ② 動機づけした結果、当日に必要な道具や仕掛けなどを準備する。
- ③ 主題(テーマ)に必要なに応じて関連した人や場所等へ事前に連絡をして、子どもたちに学ばせたい意図を伝えておく。

2) 実施時の重要な点

- (1) 活動中に子どもたちで考えあえるような話し合いを繰り返し行い、問題解決していけるように

する。

保育者は、答えを与えてしまうのではなく子ども自身が話し合いで問題を解決していく力が身につくよう問題解決へのヒントを示すなどして導くことを心掛ける。

また、保育者は、子ども同士の意見が違って、意見の衝突が起きることがあるが、その意見の違いが子どもだけで解決できることか、少し介入して解決できるように導くかを判断していくようにする。

(2) 問題解決への意識が保たれるよういくつかの仕掛けを行い、主題(テーマ)に子どもたちの問題解過程にいきつくようにする。

また、ドキュメンテーションという記録の方法をとり、問題点や課題が出てくるため、次の課題をもった子どもが探究し色々な活動に移っていくこともあるが、子どもが本来の目的である問題解決に気づくように援助していくようにする。

(3) 子どもの取り組み過程において、お米を植える時に地域の農家の方に指導してもらおう等地域の専門家に尋ね、本物の過程を知る体験を取り入れることを意識する。

3) 実施後の評価・反省

(1) ドキュメンテーションは、毎日の保育の中で、子ども発見や好奇心をもった事柄の様子、子どものつぶやきに現れる発見や好奇心など探究している行動を写真とともに記録し、保育者がその場面をどのように捉えて見ているのかを保育者同士で検討する材料であり、保護者とともに共有でき確かめられる方法である。

(2) ドキュメンテーションの記録を基に学びの途中の失敗などがもっとも重要な学びであり、失敗をさらに考えて成功に導く過程が本物の知識になっていくことを評価では重要視していく。個々の「できる」「できない」の結果だけでなく、その問題解決の途中の過程での子ども自身の学びを大切に、その上で「わかった」「できた」等の達成感を大事にすることである。

4) 評価・反省

活動を終えた後、評価・反省をする時、以下の点を抑えておきたい。

(1) 主題(テーマ)は適切であったか

主題(テーマ)が、子どもの知的な好奇心・探究心をゆさぶるものであったか。
また、持続可能なものであったか。
子ども自身が問題解決し「できた!」「わかった!」と納得できるものであったか。

(2) 個々のテーマが違った場合どうするか

問題解決へ導き方は、一つの方法しかないわけではないため良いヒント、課題を提供し子どもの活動を支えていくことが必要になる。

1つの主題(テーマ)に対して、表現遊びになったりごっこ遊びになったりするなどそれぞれの活動を取り組みあい満足するとまた、本来の主題(テーマ)に戻ってくる。そのきっかけを作るのがドキュメンテーションの記録が活用できる。

一つの主題(テーマ)が終わると、また、新たな主題(テーマ)になる場合があるが、気をつけなければならない点は、主題(テーマ)は保育者が、子どもの活動の経過を記録したものや写真などを使った個別記録などを使って保育者間で方向性を話し合い、それを基に子どもと話し合うが、保育者が提案し

進めるものではなく子どもが決定することである。

3 保育者に求められる感性と判断力

プロジェクト活動をおこなうには、保育者の感性と判断力が重要である。

1) 子どもが夢中になっている時、保育者も一緒になって感動を共有する感性や心が葛藤している時、気持ちに寄り添う感性等が必要である。

2) すぐ対応すべき時の見守りと介入の判断力をもつことである。

経験だけでは、自分の経験が正しいと判断してしまいがちになり経験主義に陥りやすいため、正しい判断ができるよう知識をもつ必要がある。しかし、保育者の「見守る」時、「介入する」時の判断と感性は、すぐに身につくものではなく経験と知識に裏付けられて身に付けていくものだと考える。

4 主題（テーマ）に沿って子どもが問題解決へ導くための保育者の役割

1) 保育者の見守りと言葉がけなどの介入や指導は、その状況に応じて行う必要があり保育者の柔軟な対応が求められる。

2) 子どものつぶやきなど子どもの発見、探究心を把握するが、その際子どもが意識してつぶやいているわけではないため、子どもが疑問をもったことに意識をもつように言葉をかけるなどするのである。

子どもが夢中になれる環境を整えるが、すべてを整えるのではなく、子ども自身が発見したり気づいたりして考えられるように環境を整えることが望ましいのである。

3) 問題解決するに至るまでの過程を大切にするには、適切な助言と支援することであるが、その助言、援助は、子どもが探究して自ら「できた!」「わかった!」と納得できる「見守り」と「介入」の仕方が必要である。

4) 子ども同士の話し合いを通して、仲間づくりを形成していくことを大切にする。

5) ドキュメンテーション記録を作成する際の子どもの捉え方、観察する眼は、最も保育者の重要な視点であり、保育観・子ども観が影響する点である。

また、環境をとして遊びの中で子どもが学んでいることを保護者に対して保育者がどのようにとらえて設定しているのかを説明できるようにすることが必要である。

その方法として、記録があり保護者には、日々の生活の中での子どもの様子をわかりやすく伝え、また懇談会などでビデオや記録をとおして共有し理解しあうものである。

そのためには、職員同士の話し合いによって、個別の課題を共有する事が必要である。

また、職場の連携が欠かせないものであり話し合いの充実のために園内外での研修の充実が求められる。

5 父母との連携を大切にする「保育の可視化」

今日の保護者の思いとして、学校教育に英語が組まれれば「早く英語を話せるようになってほしい」と目に見える「できた」「できない」に振り回されてしまいがちだが、子どもの学びたいと感じる思いは、非認知能力であり、好奇心・探究心から生まれてくるものである。これは次の学習への土台（足場づくり）となるものである。

その学びのプロセスは目に見えにくい部分があるため、保育者と子ども、保護者と相互の理解を図るために記録が求められる。この記録をよりわかりやすくするために保育を可視化する。保育の可視化は、

保育者の主観だけでなく写真やビデオ等で事実に基づいて子どもの学びを保育者や保護者だけでなく年齢によって子ども自身も友だちと共有して振り返っていけるものである。

先に述べたように、可視化の方法としては下記のものがある。

ポートフォリオは、個人のファイルであり、掲示やファイルし子どもの成長を伝えるものである。

ドキュメンテーションは、子どもの遊びや仲間との成長過程も綴られていき、子ども同士で自分たちがしている遊びの「主題（テーマ）」を振り返ることができるものである。

そのため大事なことは、ドキュメンテーションは、単なる記録だけでなく保育者、子ども、保護者を結び付けて子どもの活動と学んでいる過程を相互に確認しあうツールであり、日々の保育をおたよりでやりとりし、必要に応じてあるいは一定の節目に懇談会などで子どもの成長の過程を学びあい家庭と協力して子どもの成長を見守っていく事ができるものである。

6 小学校との接続期に育ってほしい協同的学び

プロジェクト活動は、子どもの興味・関心、好奇心・探究心から出発し、問題を解決して行くまでの過程を大事にする活動であるため、乳児期からのみたて・つもり遊びも活動の土台となる重要な経験であるが、主に就学前の5歳児が協同的な活動として行うのが望ましいと考える。

新「指針」では、0歳から1歳までを乳児保育とし、1歳から3歳未満児、3歳から就学前までの3つの期にわけられ、就学へ向けての学びにつながっていく内容になっている。

また、就学前と小学校との教科が、マネジメント・カリキュラムとして連続していくものになっていくことが示された。そのため、幼児教育を行う施設として共有すべき事項として、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が就学前までに目指すものであることが確認された。

小学校への接続期に、就学前の子どもがプロジェクト活動を行う事は、就学後のスタートカリキュラムへとつながっていくものである。学びの基礎を形成していくために必要なものであるため、積極的に取り入れてほしい活動である。

7 プロジェクト活動へのきっかけとなる1つの実践の教訓

プロジェクト活動は、協同的な活動となるには5歳児半ば頃になるが、3歳児頃からのごっこあそびを十分に行う事で5歳児ごろの協同的な活動につながるものであると考える。

この思いに至ったのは筆者が所属していた園で、それまで行事を事前に年間計画の中に取り入れ、計画的に子どもの全面発達を促していると考えていたが、「お店屋さんごっこがあるからこの製作を子どもの人数分〇〇個作って・・・」等大量生産することが、子どもの発達の成長につながっているのか疑問になった。当時、イタリアのレッジョ・エミリアの保育が紹介されている頃であったため、このような保育をするにはどうしたらよいか研究者を含めた学習会で学んだ。職員と話し合いその頃の保育課程に「総合的なあそび」という欄を設けて、お店屋さんごっこの行事予定を年間計画で決めるのではなく、子どもの思いが募った時に行う事にした。

筆者が、次に紹介する実践はその時の3歳児の実践で、筆者がプロジェクトの活動は統合保育においても有効で誰もが楽しめ仲間作りが形成されてくると確信したきっかけになったものである。

3歳児では、ごっこ遊びから運動会を経たお店屋さんのレストランまで「魔女ごっこ」が集団形成につながっていたこと、4歳児では、小人のごっこ遊びから劇遊びまで自分たちで内容を考えて一定の保育者の援助を受けながら作り上げた実践がなされた。5歳児は、毎年の活動とあまり変わりなく進み、確かに皆で作った物であるが過程が違うものになったことがある。

子ども集団の質と保育者の思いもあるだろうが、それだけではなく子ども経験も大きいのではないかと思ひ、遊びの継続がないところからは突然5歳児において協同的な活動にはつながらないのではない

かと考えたきっかけになった実践である。

次にあげる実践は、架空の魔女とのごっこ遊びに保育者が、意図的に仕掛けしたものである。

1) 3歳児の実践「魔女ごっこ」からの教訓

(1) 魔女ごっこの概要

保育園の近隣は、住宅街で瀟洒な家が立ち並んでいる。子どもたちは日頃の散歩で、ここは煙突がある「3匹のこぶた」のお家と出して出かけていた。その一つに、3歳児はしらなかったが、隣園の近くの公園付近の高台に洋館があり、失礼ながら「魔女の家」と名付けていたところがあった。

「魔女ごっこ」の始まり

春の遠足でのこと、隣園の5歳児が、魔女のお話でごっこ遊びしており、「不思議な幹のある木は魔女の木だから気をつけてね」と教えてくれた。

5歳児から教えてもらった3歳児は、すっかり魔女のお話の世界に引き込まれたのか、不思議の木はどれか興味津々になった。そこで保育者は「これだ!」と思い魔女ごっこで遊ぶ事にした。

「魔女」からの贈り物

3歳児の子どもたちは教えてもらった魔女の木や魔女の家を探して見たりする散歩をしたりして遊ぶ中で、保育士は、次にいく時には、どんぐりを置いておいて魔女からの贈り物にした。

どんぐりの色々な種類を並べ、「公園に落ちてるよ」と魔女からの手紙が置いてあり、子どもたちは色々などんぐりがどこにあるか探し、見つけたどんぐりにクヌギやしいの実のどんぐりがあったので「お父さんどんぐり、赤ちゃんどんぐりなどと楽しむ事ができた。魔女とのやりとりをしながら遊んできた子どもたちは、いるのかいないのかわからない魔女だが、運動会も魔女ごっこを取り入れて、ごっこ遊びの延長で楽しんだ。

「魔女」が与えたものとは

その運動会の取り組みの中で、ある子は、少しだけむずかしい体育あそびにも魔女が応援してくれているという思いから「少し勇気がいるけど」でも挑戦してみようとする姿が見られ、ごっこ遊びが、単なるごっこ遊びではなく子どもにとっては、抛り所にもなる存在であると確認できた。

(2) 実践からの教訓

① 興味・関心から好奇心・探究心の芽生え

身近な遠足で5歳から聞いた話が興味・関心になり、「魔女」という魅力的なキーワードは、3歳児の気持ちに本当にいるのかなと好奇心と探求心をもたせた。

② 出来事を掴んだ保育士の感性

ここでは「これだ」と思ったきっかけは、保育者が、3歳児の個々の遊びから、クラスの仲間づくりを考えたときであったこと。

何かみんなのできる遊びはないか模索していた時であるという土台があったので、5歳児からの話がきっかけとなり、3歳児の子どもたちが興味を持ったことを受け、主題(テーマ)にして取り組んでみよとした。

③ 保育者の仕掛け

何もしなければ、子どもたちも忘れてしまい魔女ごっこも起こりえなかつたろう。

子どもが気づかなければそれだけのものであるが、環境に少しだけ仕掛けすることで、あそびが広がることもある。

この実践で、子ども同士で期待感をもってごっこ遊びの世界に浸ることができたきっかけとなったのは、どんぐりや手紙というアイテムを環境設定する事で、遊びを継続して子ども同士の思いをつなげていく事ができた。

意図的に子どもたちの好奇心から探究心に変わっていくところを捉え、部屋では、魔女のお話や季節のどんぐりの絵本などを設定しているのである。

保育者の育ってほしい願いが、子どもの思いにこたえた環境構成を取り入れていきたい。

④ 子ども同士がつながる

遊びが継続して広がるのではなく、確実に子どもたちの心に「魔女」の存在が子ども同士を結び付ける存在になっていくことが大事である。

(3) 実践の考察

この時の実践は、まだごっこ遊びの延長として考えており、子どもの様子を観察記録するまでに至っていなかったが、子どもたちが、「魔女」の存在を拠り所にできる存在になりえたことは、単なる生活の模倣的ごっこ遊びと違い、大きな質的な変化のある学びに成りえたと思う。

この時は、文字のみの記録で保育士の振り返りであったため、可視化により子ども同士が振り返ることはできていないが、可視化した記録が残っていたなら子どもの反応もさらに楽しみであったと反省する。

8 保育内容「環境」における自然にふれる体験学習について

ここまで、これから就学前の活動として取り入れるとよいプロジェクト活動について説明してきた。また、どのように取り組むとよいかを述べてきたが、新たに取入れていくべき活動であるため、試行錯誤した実践の取り組みがされているところである。

そこで、学生がこの新たな活動を学んでいくにはどのような学習体験が必要であるか以下のような体験学習を試みた。

1) 体験学習のねらい

保育内容「環境」において自然にふれる体験は不可欠といってよい。子どもたちが散歩に出かける時、五感の刺激を受け風・光・樹々にとまる小鳥のさえずり等を体感しながら、道端の雑草や虫にも目が留まるなど様々な発見がある。

また、社会との関わりが広がり町の商店の様子や看板、道路標識など身近な生活の中でふれるものがたくさんある。

- 学生が、保育者としての資質・役割を学ぶ内容は多いが、この体験を通して学ぶ点は
- 1つ目は、自然にふれ五感で感じる事で子どもと共に共感する感性をもてるようにする。
 - 2つ目は、子どもの目線で自然や社会の生活を観る。
 - 3つ目は、保育者目線で危険な個所等を確認する。 ことである。

学生は、視点を变えるだけで多くの情報を体験学習から学ぶことができ、本物にふれ感動・共感の感性を育てるものと考え。

2) 事前学習について

領域「環境」の中の自然に関するプロジェクト活動を理解するために、学生と一緒に仮想として体験をする取り組みを行った。担当教員としては、プロジェクト活動の仮想体験として流れを理解してもらえること、自然にふれ五感で感じる 観て、聞いて、感じる事を学生自身が体験し楽しい！と思えることが、保育の中で子どもに伝えたい事につながっていくため、子どもと共に共感する保育者になってほしいと企画した。

体験学習として、専門家から五感で感じるネイチャーゲームを学び、その後、振り返りをし、次の「おさんぼマップづくり」のテーマを決めプロジェクト活動として協同的活動をする体験を行った。

事前学習として

「自然のビンゴゲーム」の前の授業に事前学習として、担当教員が緑地公園へ事前に出かけて下見をしてきた公園内の様子やネイチャーゲームがどのようなものであるかを伝えるため、前年(2015)年度のネイチャーゲームのいくつかの種類をパワーポイントを活用して紹介し、どのように取り組むのかを伝える。

また、その後に行う「おさんぼマップ」づくりを行う事について説明した。2つの体験学習は、一つひとつ単独でできるが、目的に合わせて2つをつなぎ合わせる接点をつくったものである。

その活動の内容を以下に報告する。

3) 体験学習例 ①「自然のビンゴゲーム」ネイチャーゲームの体験学習

(1) 教育目的：1回目の活動のためのねらい

- ・自然にふれ、自ら五感で感じる事で感性と観察力を養う。
- ・多種多様な樹木があり、保育者としては、触るとかぶれる危険な木や葉を学ぶ。
- ・保護緑地ならではの樹木数と森の探検を行い、自然保護の観点を学ぶ。

実施場所； 大学近くの緑地公園

実施方法； ネイチャーゲームの専門指導者に協力を得る。

1回目の授業では、7グループにあらかじめ決め、自然体験する散歩を実施するが、前出のねらいと体験学習の流れを事前に伝える。

当日は、散歩に出かけ、自然体験だけでなく、町の商店や道路標識などを確認する。

道路など子どもが歩くと危険な場所は、保育者はどのように誘導するのか考えながら近くの公園へ出かける。

「自然のビンゴゲーム」のルールは、ビンゴの用紙には身近な自然の中にある五感で感じるものが指定されており、グループで協力して見つけるゲームである。

自然のビンゴゲームの遊び方

花にも色がある。音にも小鳥のさえずりや虫の声などいろいろある。

木にも縦縞の模様や横縞や点々とか柄がある、曲がった物や匂いもよい香りのものや臭い匂いの物など様々あるので色々な物を探してビンゴを作っていく遊びである

五感を刺激しながら、色々な発見を楽しむことができ仲間づくりにもなる。

緑地公園までの間に散歩の醍醐味である散策活動し、道端の草花を見つけたり鳥の声に耳をかたむけたりしてゲームをグループで行いながら歩く。

学生は、緑地公園の自然に関わりゲームを楽しみながら好奇心を抱くようになる。

ゲーム終了後は、この活動で感じたことや気づいたことを専門家に伝えるため、感想を記入し振り返りを行う。

観て聴いて感じてふれて味わっていたことを記入する。

上述の流れで体験学習を行った。

(2) 専門家からの指導

ネイチャーゲームの専門指導者とともに散歩をし、身近な街の中に存在する危険な植物や虫などについて学び、また、五感で感じるとはどういうことか考えるヒントを得る。

緑地公園では、自ら体験し発見する喜びをグループで協力しながら行う楽しさを体験する機会を得る。

(3) 学生の体験学習の主な感想

普段何気なく通っている道もよく見ると多くの植物や生き物が隠れているのだと思った。木の幹の模様が縦と横がある事や葉の香りなど気付かない事が多く、よく観て、触り、嗅ぎ、聞く事で見つけられるのだと思った。

ビンゴという形で子どもが楽しみながら自然について学ぶことができるネイチャーゲームは、素敵な教材だと思った。ゲームをする中で、人と人との会話が増えるのもこのゲームのよいところだと思った。

(4) 考察 「自然のビンゴゲーム」

さんぽの道順から子どもの視線を意識して観察することについては、学生は、ほぼできており心がけていた。五感で感じる事を大事にし、「自然のビンゴゲーム」を行いながら公園までの道中に行くが、現地では、触ってはいけない葉を学び気づかなかった町の中の危険に注意を向けることができ、ほとんどの学生が身近に存在する危険な物に対する意識を持つ事ができた。

また、触れるとくさい匂いがする葉など、見た目だけではわからない身近なところに注意することがあるので自然のものの知識を持とうとするきっかけに成りえた。ことが、確認できた。

4) 「おさんぽマップ」づくりの

「おさんぽマップ」づくりのため、次の視点を持って行った

(1) 仮想で子どもを散歩に引率していくため、安全に引率していくための方法や町の中の危険な場所なども観察していく必要がある。担当教員の信号のあるところ、ないところの引率の仕方を示し「守られているみたい」と体感しながら学んだ。

(2) 子どもの視線で街をみてどのようなところに興味・関心をもつか考える事を1回目の緑地公園までの散歩で観ておく課題があった。

(3) 担当教員は、「おさんぽマップ」づくりのため、学生がネイチャーゲームで学んでいる様子を写真に撮り授業で学生の学びをドキュメンテーション記録としてとり、準備しておいた。

(4) 植物・昆虫図鑑を用意し、マップ作りの時に調べる参考になるよう準備しておいた。

(5) グループ内で意見が出せない子がいない様にKJ法をもちいることにし、付箋、模造紙、を用意した。

このような事前準備をし、次に観察した事を振り返りながらそれぞれの主題(テーマ)を決めて、子どもとつくる、保護者向け、など各グループで話し合っって作成することを2回目の授業におこなった。

5) 体験学習例 ②「おさんぽマップづくり」でフィードバックする

(1) 教育目的；1回目の散歩で行った2回目の活動のための課題

- ・現地までのルートを利用し、交通ルールと子どもを安全に誘導するため、信号のある場所でのつき方、信号がない道路での保育者の付き方を実際に学ぶ。
- ・保育者としての豊かな感性を磨き、身近な環境の知識、探究心をもつ機会にする。

実施場所； 教室

実施方法； 1回目気づいたことや観察した事を学生の学びのドキュメンテーションにし、スライド等でフィードバックする。

グループワークを行い、お互いの気づきを確認し合い、互いの意識の違いなどにも気づく事ができる。

(2) 7グループはあらかじめ決め、体験学習の振り返りをする。

- ① 予め、用意した学生の「自然のビンゴゲーム」をしている観察の様子を写真でとり、学びのプロセスをスライドにして振り返りを行った。
- ② 植物図鑑、昆虫図鑑を配布し、調べることを行なえるようにした。

6) 五感で感じる自然体験を主題とした。

(1) 「おさんぼマップづくり」の各グループの主題(テーマ)を決定する。

- ① 散歩の体験で子どもの興味・関心についてグループで話し合い、予測をたてるテーマを決めて作成する。
- ② 具体的な体験テーマは、グループごとに情報交換し話し合っ決定し実施する。
その際、意見が出せない人がいない様に必ず話し合いに参加できるように KJ 法をもちいた。
- ③ 体験を通して子どもの興味・関心について仮説をたてる。

学生は、主題(テーマ)について子どもとつくるものにするか、親子向けのものにするか、職員の共有するものにするかなども考慮し、それぞれの観察してきた事の意見を出しあい、意見まとめることを行った。

7つのグループがそれぞれ自分たちの考えたテーマ(重複アリ)で「身近な自然マップ」、「交通安全マップ」、「町の標識やお店屋マップ」「親子で楽しむ自然体験」等、テーマも表現も様々で、子どもとつくるもの、親向けに掲示するもの等作成していた

6) 具体的な体験テーマは、グループごとに情報交換し話し合っ決定し実施する。

学生の話し合いの様子は、同じところを見てきたのに一人ひとりの気づきの違いに驚きながら、学びのプロセスのスライドにされていない点も話し合いながら気づきマップ作りに活かしていた。

7) 各グループで共同制作し発表する。

各グループで共同制作したものを発表し、他のグループからの意見をもらう形式で行った。

8) 発表後の学修の振り返りをもとに成果を共有する。

各グループは他グループのテーマや活動展開から様々な形で作られ、色々な観点からの気づきがある事を学ぶ機会になり、発表後の学修の振り返りをもとに成果を共有した。

9) 学生の体験学習の主な感想

先週のネイチャーゲームの振り返りを通して植物や昆虫の知識が定着した。探索した後「楽しかった」で終わるのではなく、振り返って図鑑でみてさらに詳しく理解することが次にまた、探索活動をしたと思えた。

グループの人の中でも散策した時に気付いたことが、(話し合いの中で)一人ひとり違ったので、今回も新しい発見があった。同じ道を歩いて行ったのに人によって気付いたことが違うのは不思議だなと思った。その一人ひとりの気づきを振り返りでみんなで共有する事ができるところが良いと思った。

10) 考察 「おさんぼマップ」づくり

「おさんぼマップ」の作成という課題で、子ども視点で街を見る、保育者視点で見るという体験を通

して、グループ内で話し合う中で、同じ道を歩いてきたのに「えっ そんなものあった」という情報交換が非常に新鮮な様子であった。

誰に対してのメッセージを送るかによって様々な主題（テーマ）ができるので、発表により眼で見て理解できるため、保育者になったら現場で子どもと振り返る方法の一つとして学びを深めることにつながっている様子であった。

1 1) 2つの教育実践からえた体験学習の考察

子どもが夢中になっている遊びに対してテーマを見出し、共有していく遊びを見つけるきっかけになる感性は、座学からだけでは磨かれないものである。今回の体験学習が自然・社会に子ども目線で触れる体験を実際に行い身に付けるきっかけになったと考える。

自然体験の「自然のビンゴゲーム」では、

(1) 五感で感じる事を一つ一つ確認しながら取り組んだことで、五感で感じるとはどういうことか学生に意識化された。

(2) グループで見つけるという課題があることで協力して行う事、仲間意識が芽生えたという感覚が合わえたことで集団づくりをしていく上で大切な経験を積んだ。

振り返りの「おさんぽマップ」づくりでは

(1) 各グループで主題（テーマ）を何にするか決定する時、子ども向けのもの保護者向けのものでは注意する視点が違うので1つのグループの気づきを共有し合えた。

(2) 短い限られた時間での作成で、全員が話に参加できることをねらい付箋を利用したKJ法にて行ったが、意図は、伝っていたので、それぞれ役割分担して取り組み、グループ内での話し合いで、学生の気づいたものを調べたりして取り組む姿勢があった。

(3) おさんぽ「マップづくり」の前に振り返りとしてフィードバックしたのも効果があった。

(4) 体験学習について、座学の大切さと合わせ、特に保育内容「環境」においては、五感で感じる感性の磨きをかけ、実際に触れて細やかな観察する視点を持つ事につながった。

(5) 学生自身が楽しいと感じこの自然の豊かな体験を子どもたちに伝えたいという気持ちが、最も重要なことであり、子どもと一緒に学ぶという事の基礎の育成になっている。

また、その後の探究活動の意識化は学生の意識の変化から伺えた。

(6) グループで一つのものを作り上げることで意見のぶつかり合いや目的に対する意識など協同体験をすることは、保育者として子どもたちが話し合いを繰り返し協同的な体験をしていく事を理解するうえで必要な体験であると確信できた。

(7) 提案の仕方には、観察シートなどをだし、視点について不十分であったため、今後の提案の仕方に工夫が必要であった。

体験学修の展開の仕方には、今後の課題として改善する必要がある。

学生自身が社会人としての生活者であり、生活を楽しむことも保育者には必要な感性の部分である。本物の自然にふれ、子どもの視点に立って街を見る体験は、これからの学生生活においても「保育者になったら」という視点で見る機会になり効果的であったといえる。

以上の学生の体験学習を通して、今後身に付けていきたい学生の心構えを次のようにまとめた。

9 プロジェクト活動を行うための、学生がもつべき心構え

就学前に育ってほしい子どもの姿であり、就学後の「学びにつながる力」の形成をする活動である。

領域「環境」においては、子どもに身近な環境についてどのように提案していくか広く環境問題まで捉え、環境教育として考える事が望ましい。

1) プロジェクト活動が持つねらい・意義を理解する

主題（テーマ）は年齢に応じた内容で設定し、子どもが興味・関心をもったもので、探究することが可能ものであることと活動が、計画、実施、評価・反省し、新たな主題（テーマ）ができるという事の流れを理解する。

計画にあたっては、子どもが安全に活動できるように整理すること。

2) 子どもの変化に気付く、観察力を高めること

日常生活の中で普段の子どものあり様を学び、子どもの変化に気付く観察の眼をもつようにする。

子どもが自然のもつ変化を発見したら、その気持ちに応えようとする。

3) 子どもの気持ちに立って考える

子どもと共に共感し探求しようとするにとことん付き合う姿勢をもつ。

子どもの遊びあるいは、トラブルの対処を含め、「見守り」と「介入」するバランス感覚を持って、適切な援助、助言、指導をする。

4) 安全意識

安全に対する判断力、子どもの自由な発想に応じて展開していく活動であるが、安全が保たれる意識を持つのは当然の事である。

V まとめ

国立教育政策研究所のプロジェクト研究「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究（平成27～28年度）」成果報告会（2017年10月27日）において、スタートカリキュラムの実践例と幼児教育の質の評価スケールについての報告がされた。それを受け「育ち・学びを支える力」社会情動的スキル（非認知的能力）をつける保育の活動としてプロジェクト活動が有効であることを確認した。

筆者がこれまで述べてきたように、プロジェクト活動とは、主題（テーマ）があり、一人ではなく複数での取り組みで、問題解決までの試行錯誤するプロセスが大事な協同的な活動である。協同的な活動を行うには5歳児後半ごろであるが、3歳児ごろからのごっこ遊びが十分に行われていることが基礎になり、5歳児になって発揮されるものである。

1 保育内容「環境」におけるプロジェクト活動について

保育内容「環境」においては、子どもが自然にふれ、五感で観て感じてふれる情動を揺さぶる活動を十分に行う事が「思考力の芽生え」の土台となる。

子どもの好奇心・探究心により「～やってみよう」と試みることで、「そうか わかった」という子ども自身の探究活動が十分行える環境を整えることを保障することに重点を置く必要がある。

さらに、忘れてはならない事は、その土台を築くのは乳児期の愛着、信頼関係である。情緒の安定があつてこそ生まれる好奇心・探究心である。心がぐらつきやすくては、探究活動を深めていくことはできないからである。

そこで、プロジェクト活動の計画、実施、評価が・反省についての流れを説明し、そのため必要な手立てを述べてきた。

2 保育者の役割について

さらに、保育者に求められる感性と役割について、子どもの探究心を見ながら「発展の契機」を見つける感性が必要であり、子どもの偶然のできごとを子どもとの対話により意識化することで、より探求しようとする気持ちを引き出す。その探究の過程では、保育者の子どもを信じて待つ「見守り」と同時に、適切な助言・援助・指導することが大きな役割となる。しかし、保育者に求められる、この子どもとの確かな信頼関係の中で、信じて待つ「見守り」と適切な援助、少しだけヒントを出す、「介入」するバランスは、経験と技術、感性が必要である。

また、子どもの思いを「予測」して意図的に環境を整えていくが大事であるが、一つのテーマで体験した子どもたちが、ここに新たな探究心が育つことが極めて大事である。

ある子は・・・ある子は・・・個々の子どもたちの反応をうまくとらえフィードバックさせる作業が必要であり、そのために必要な記録としてドキュメンテーションをあげている。

注意しなければいけないのは、画一的な発想で集団の統一を図るような関わりではなく子どもの自由な発想を大切にすることの方が大事であるという事である。

3 学生に求めるもの

学生が、保育者の感性と役割を身に付けていくために、子どもの探究心、子どもの見方とその子の疑問をどう見て、捉えるかという保育者の観察する目を養い子ども観や保育観を持つように努める事である。そして保育する者の人柄が、子どもの気持ちを肯定的に受け止め、子どもの自己肯定感を育てていけるよう援助することが大切であることを述べ、そのために、まずは、学生自身が自然にふれ自然のよさを感じる感性を持つことが子どもたちに伝えられる人になると行なった体験が、提案した体験学習である。

自然から得る感性を子どもの視点で見ることをベースに自然観察の視点を取り入れた「自然のビンゴゲーム」と「お散歩マップ」の2つの体験学習の取り組みを行った。

目的は、学生自らが、子どもの学びの過程を体験し1つ目は、自らが観察し体験することで活動のプロセスを掴む。2つ目は、子どもの興味・関心から発生したテーマの援助方法の気づきになる。3つ目は、グループで作ることにより、協同的な学びの体験になると思い実践を行った。

結果は、この実践で同じ体験をしてもそれぞれ観察していたポイントも異なりグループ討議し学修を深めることができた。自然をじっくり観察し見る視点が深まり、興味・関心が高まったことのポイントを掴んだことと大人目線で、複数の幼児を引率していく方法や安全や危険に対する意識を深めることも付随して学びになった。また、体験した事を「マップ」にまとめる作業を協力して行う事により、意見をまとめることで協同的な学びになったため、次のステップにする過程を学ぶため体験学習を行い、こうした方法も体験学習は有効であることを確信できた。

しかし、提案の未熟さもあり、感想にとどまったため、観察シートのあり方等を改善して行けば、プロジェクト活動の流れを学び、ドキュメンテーションという過程を記録し、学生同士の情報交換をすることが有効であろうと次への課題ができた。

4 今後の施設整備の課題

プロジェクト活動の有効性と保育者のあり方、役割についてここまで述べてきたが、複数担任で記録係も必要である。これらの事を保育士不足の現状のある中で、取り組むには厳しい状況がある。以下の点についての整備が課題である。

- 1) 子どもの主体的な活動を育てるために、子どもの要求に対応できる体制が必要である。
- 2) ただ人数が増えればよいわけではないため、研修等の自己研鑽を高めることが必要である。
- 3) 大学側の受け入れの整備も必要であるが、タイアップして保育者の質の向上に努めることも重要な

役割になる.

4) 子どもが主体的に物事に関われる活動を見守れる子ども観, 保育観を持った人材が育成されること大切である. そのために, 保育者養成機関の役割は, きわめて重要である.

引用文献

- ① 厚労省 (2017) 『保育所保育指針』フレーベル館 : p11 p19
- ② 大森・進藤 (共著) (2010) 『保育内容「環境」論』第10章 ミネルヴァ書房 : p176

参考文献

- ① 有賀克明編著 『いつでもどこでも環境保育—自然・人・未来へつなぐ保育実践—』 (2008) フレーベル館
- ② 久保田浩 『あそびの誕生』 (1973) 誠文堂新光社
- ③ 倉橋惣三 『幼稚園保育法真諦』 (1934) 東洋図書
- ④ 請川滋大, 高橋健介 『保育におけるドキュメンテーションの活用 : 新時代の保育1』 (2016) ななみブックレット
- ⑤ 中坪史典編著 『子ども理解のメソドロジー』 (2012) ナカニシ出版